
総合職の同僚と（改）

M @ A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

総合職の同僚と（改）

【著者名】

ZZマーク

29088F

【作者名】

M@A

【あらすじ】

職場の同僚との話。18禁ではなかったのですが多少、改変しました。

今日が人生の分岐点だ。

誰にも一度や二度、そう感じる時があるだろう。

俺は、まさに今、それを感じていた。

高ぶる気持ちを抑えるように、落ち着けと自分に言い聞かせる。

同じ会社の同僚との待ち合わせで、駅ビル正面にある

彫刻かモニュメントか何だかわからない物の前に立っていた。これから食事に誘い、その席でプロポーズをする計画だった。

同期入社した彼女には、何故か男の噂がなかった。

実際は俺が聞かないだけで、モテるのだろう。

あれだけの容姿なら当然だ。

しかし、入社から三年、同じ部署で彼女を秘かに見続けてきた自分の判断からすると、現在彼氏はいないようだった。仕事のせいもある。

お互い仕事に打ち込んでいた。

総合職の女性の割合は少なかつたが、

彼女は残業も休日出勤も男性と変わらずこなしていた。

彼氏がない、という結論はそんな理由からでもある。

俺だって忙しくて彼女が出来ないからだ。

先輩社員のほとんどは職場結婚か、

仕事関係の付き合いから発展して結婚に至っている。

自分も、その例に続きたいと思っていた。

彼女を初めて見た時、その美しさのあまり感動してしまった。肩まで真っ直ぐに伸びた髪、理知的な瞳、整った鼻筋と口元。こんなに自分の理想のタイプがいるのかと思った。

仕事で彼女と話す時は、どんな時よりも緊張している自分を感じた。名前も良かつた。

俺は一文字の名前が好きだったので、その点も好ましく思えて、ますます彼女との出会いが運命的なものだと感じられてしまった。しかし、そうすると、マキちゃんでもナオちゃんでも、全て運命の人になってしまふが、その点は考えずにいた。俺のそういう想いを同期の友人に話すと、

「言い過ぎだろ？」「と笑われた。

他にも

「彼女の話をし出すと止まらない」とか

「お前みたいに美化し過ぎるのも考え方だ」という意味の皮肉のよつた反論をされた。

客観的に見れば、

『部署では一番かもしれないが、社内では一番ではない』

というのが妥当な評価らしい。

しかし、俺にとつては、そんな事は重要ではない。

自分の理想とする人がいるのだから、何としても交際したいし、このプロポーズを成功させたい。

その想いが強過ぎて慎重になり、ここまで具体的な行動は起こせずにいたが、ようやく今日、前進出来そうだった。

その為の仕込みは万全だった。

さり気無く仕事を手伝い、一緒に残つて残業をしたりした。

それが実つて、部署では一番心を開いてくれるようになつた。

もしかしたら社内で一番親しいのは俺かもしれないと思つまでになつた。

だが、それでも彼女と仕事後に会うのは今日が初めてだった。

彼女は、忘年会などの会社絡みの飲み会には参加しても個人的なものには食事すら参加しなかった。

その為、今日も「少し相談があるから喫茶店で時間をもらえないか

と嘘をついて誘つたのだ。

実際には少し高田のレストランを予約してある。

今月は厳しくなつてしまつが仕方ないだらう。

先月のボーナスだけが頼りだ。

そんな事を考えていたら彼女の姿が見えた。

今日も輝いている。

美しい。

溜息が出てそうになつた。

「お待たせ。どこにするの?」

「向こうに落ち着く店があるから、ちょっと歩いて」

そう言って連れ出す。

彼女は黙つてついて来る。

「いじ?」

店の前に立つと、彼女は俺に向かつて言つた。

「そう?」

「喫茶店じゃなかつたの?」

「そうだつけ?」

とぼけて誤魔化した。

受付で彼女に聞こえないように予約した皿と名前を告げた。

席に案内される。

壁際の奥の方にある二人掛けのテーブル席についた。

メニューを開いたけど、

前もつて調べていたから頼む物は決まつていた。

洋食のコース料理。

店内は半分ほど埋まつていて、席の間は広いから話に集中出来る。

次々に運ばれてくる料理を消化しながら適当な話題で場を繋げ、デザートまで辿り着いた。

そこで、今日の目的を打ち明ける。

結婚を前提に交際したい、と告げた。

彼女は驚いていたが、デザートを食べ終わらないうちに断られた。
理由を訊くと、既に彼氏がいるらしい。

今度は逆に驚かされた。

会社の男だろうか。

それとも取引先の男か。

大学時代の男かもしない。

そんな話は聞いた事がなかつたので、
つい問い合わせるように訊いてしまつた。

彼女は、そのどれも否定した。

そうすると、さらにムキになつてあれこれと質問を重ねた。
出会つた場所やどんな男か、など。

考えてみれば、彼女とこんな話をしたのは初めてだつた。

「普通の人」

俺の質問に、彼女は最初そう答えた。

普通の人と言つても、

彼女みたいな可愛い子の言う「普通」なんて当てにならない。

俺は、きっかけから訊ねていつた。

それから、彼女の打ち明け話が続いた。

「私、高校の時から、なんとなくモテだしていたのね。

中学の時は、そんなじゃなかつたんだけど何故か高校くらいから
色々な誘いが増えたの」

「へえー」

さぞ可愛い高校生だつたんだろう、と想像した。

「そういうのつて、わかるじゃない。周りの目も変わるし。

……それでさ、結構天狗になつていたんだと思うんだよね。

今、考えると、ひどいなつて事もしてた気がする」

「それで？」

「その頃、知り合った人なんだけど、

その人も私に好きだつて言つてくれたの。でも私、なんか
その気になれなくて、別に嫌いじゃないんだけど、断つたのね
(まあ、そういう時もあるだろう)

「でもさ、その人私がフツテるのに、その後も普通にしてくれてね。
色々困った時とか助けてくれたんだよね」

彼女はカップを取り上げて、

さつき運ばれて来た食後のコーヒーを飲む。

「それで、最初の内は、私も『私によく思われたくて、してるんだ
な』

とか『気が変わるようにしていろいろなんだな』とか思つてたのよ
「そういう意味もあるだろ?」

「でもね。それって一週間とか短い時間じゃなくて何ヶ月とか続いたの」

「そりなんだ」

感心したように言つた。

「で、そうしてると、何かと話す時間とか一緒にいる時間が
増えてきて、私もなんとなく『付き合つてもいいかもなあー』って
思つてきたんだよね」

「で、付き合つたの?」

彼女は首を振つた。

「付き合えなかつたの」

「なんで?」

「やっぱり、私が一度断つているつていうのがあるから、
ちゃんと付き合つなら、今度は私から言わなきゃいけないなって
思つていたんだよね」

頷く俺。

「でも、その辺が私のずるかつた所なんだけど、出来れば、
もう一度彼の方から告つてくれないかな……なんて思つてたのね。
……それで、こう……彼が言つてくれないかな、なんて思いながら

そういう状況を作ろうとしてみたり、色々してたの

彼女は、大まかにだが、当時の作戦の数々を話してくれた。聞いていると、一人きりになるようにしたり、

会う機会を増やそうとした彼女の苦労がよくわかった。

「で、そんな風にしてたら、彼の方で、

もう一度告白してくれるんじゃないかなっていつ雰囲気を感じるのね

「で、言つてきたの？」

彼女は否定した。

「そうなると、私からは余計に何も言えずに待つちゃって。早く言つてくれないかなって感じでさ。でも、なかなか彼は言つてくれなくて……」

当時を思い返すみたいに少し上を向いた。

「そんな繰り返しで、時間だけ流れて……、

私の方も、いい加減『もう言つてしまおう』といつ気持ちになつてきて。

それと比例するみたいに、彼の方でも、何か言おうとしてくれる感じがすごいするのね。

で、『もうじつちでもいいや、この日に言おう』って決めたの。

それで結果的に彼の方が先になつたら、それはそれだし、私が先になつても別に問題ないや、って思つたんだけど……

「だけど？」

「彼の方の都合で急に会えなくなつちゃつたんだよね

その経緯を簡単に説明した。

「しばらくしたら会えるんだろつ、って思つていたんだけど、私の方でも受験があつたり色々あつて、それつきり会えなくなつちやつた。

メールもしたんだけど、アドレス変わつてたし……

「好きな女でも出来たんじゃないの？」

意外にも彼女は同意した。

「そう。私もそう思つて。

でも何となく、その後どうなったのか知りたい気持ちがあつて。大学入つても好きな人とか出来たんだけど、頭の隅にその人の事が残つてゐるよね」

さらに彼女は続ける。

「それで……、大学卒業するくらいかな?

買い物してたら偶然高校の時、同じバイトをしてた知り合いに会つて、

昔話をしていたら、その人、彼のアドレスを知つてゐるつて言つたよ」

「驚きだね」

「私もビックリして『何で知つてゐるの?』つて訊いたら、その知り合いも、たまたま彼とバッタリ会つて交換したみたい。その人も、急に彼と連絡取れなくなつちゃつていたから気にはなつてた

みたいで、『あれからどうしたの?』つて感じで話が弾んで、また連絡取り合つてゐるつて言つてたの。

男同士つていいわよねえとか思つた

「で、連絡したんだ?」

苦笑しながら彼女は言つ。

「なんか笑つちゃうくらい白々しく

『そう言えば、彼に連絡したい事があつたんだ』

とか言つてアドレスを訊いたわ

それからは、順調にいつたようだ。

その彼は、彼女のメールに返信してきて長い間の音信不通を謝罪し、彼女の方は、それ以上の謝罪のメールを送つた、と話した。そして、二人の関係は昔以上に親しくなつたらしい。

彼女は、二人が既に半同棲している事や、部長には、結婚をする事と

どこで発表しようか考えている事、皆が揃つ忘年会あたりに部長から
お願い出来ないかと相談している事、などを話した。
最後に、「だから、しばらく皆には黙つていてほしい」と付け加え
た。

「じゃあ仕事辞めちゃうのか？」

「わからない。彼は続けてもいって言つてくれているし、

部長も期待してくれているみたいだから……」

その時、僅かに低音と振動が聞こえた。

彼女は慌てて携帯を取り出すと画面を覗き込む。

「ごめん、……なんか彼が、これから会おうって言つただけど……
駅まで彼女を迎えて来るようだ。

俺達は会計をして店を出た。

半分、払おうとする彼女の申し出を頑なに拒否した。

並んで歩きながら駅まで着くと、

俺は、その男を一目見たい一心で彼女と話しながら、
一緒に彼が来るのを待っていた。

やがて俺の前に現れた彼は、

スーツを着た仕事帰りの平凡そつな男だった。

彼女の言う通りで、背は俺と同じくらい、

顔は俺も負けてないだろう、という気がした。

どんなカツコイイ男が来るのか、と身構えていた俺は拍子抜けした。

「彼女に相談に乗つてもらつて……」と言つて訳をすると嫌な顔一つ
せず、

逆に「こっちが困つた時には、よろしく」と言つてきた。

彼は、彼女の事を呼び捨てにしていた。

彼女は、その横で照れたように笑つていた。

それから俺は、二言三言交わして一人と別れた。

二人は、会釈をして、俺とは反対方向に向かつ。

少し歩くと、携帯を取り出して、同僚の番号を押した。

「あー、俺だけど……、駄目だったよ」

「そつかー。残念だつたな。理由は何で?」

「いやー、よくわからんけど断られた」

「じゃあ、俺の出番かな」

「おいおい、俺が無理なのに、お前じゃもつと無理だひーーー」

そんな軽いやりとりをして電話を切る。

最後に同僚は「元気出せ」と言った。

振り返ると、一人の姿はもう見えない。

(楽しそうだつたな、彼女)

ふと思いつ返す。

今まで見た中でも一番の笑顔をしていた。

それは、ずっと彼女を見てきたから自信を持つて言える。

きっと、彼といふ事が幸せなんだろう。

相性がいいと言つのか。

お似合いと言うのか。

とにかく、僅かな時間で一人の絆みたいなものを感じた。

(これから、二人は、ずっと同じ道を歩いていくんだろうな)

不意に抑えきれない感情が湧いてきたけど、

彼女の明るい未来を想像しながら改札を通り抜けて電車に乗った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9088f/>

総合職の同僚と（改）

2011年2月1日03時42分発行